

公開講座 大人の教養倶楽部「Distance - "隔たり"の教養学」

著者	高野 岳彦, 李 承赫, 松尾 行雄, 佐久間 政広, 高橋 秀幸, 泉山 靖人, 岡崎 勘造, 井上 正子
雑誌名	人間情報学研究
号	28
ページ	89-93
発行年	2023-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024857/

大人の教養倶楽部

「Distance－“隔たり”の教養学」

教養学部と人間情報学研究所の共催で、2017年度より「大人の教養倶楽部」が開催されております。この講座の趣旨は、教養学部における知的営みの幅広さと奥深さを知っていただくことを目的としております。学内で最も多くのスタッフを擁する教養学部は、同時に、そのスタッフを多種多様な学問領域から集めている学部でもあります。

2021年度は、コロナ禍の昨今、今までになく意識され、求められる「隔たり」をテーマに選びました。選りすぐりの講師が「隔たり」を手がかりとして私たちの世界を眺めてみると何が描き出されるのか、一般のみなさまに分かりやすくお伝えしました。

人間情報学研究では、「大人の教養倶楽部」で提供された講演内容の概要を記録の観点から掲載することにしています。

2021年度「大人の教養倶楽部」講演内容一覧

	開催日	テーマ	講演者
第1回	10/2	隔たりと地域性	高野 岳彦
第2回	10/9	「遠い国」と「近い国」 －国際関係における「ディスタンス」とは	李 承赫
第3回	10/16	「音で“隔たり”をこえる」	松尾 行雄
第4回	10/30	隔たりの空間としての都市 －密集空間で求められる作法	佐久間 政広
第5回	11/6	モノのインターネット (IoT) を活用した 防災・減災の現状と課題	高橋 秀幸
第6回	11/13	学びの隔たりを克服する	泉山 靖人
第7回	11/20	健康運動という考え方に対する「隔たり」	岡崎 勘造
第8回	12/4	性的多様性で読む『ロミオとジュリエット』	井上 正子

「隔たり」と地域性

教養学部地域構想学科

高野 岳彦

私の専門である地理学は諸事象に地域性を見出してその由来を探求する学だが、「距離」や「隔たり」はまさに地域性の形成原理にかかわる。例えば、日本の方言は関西と関東に二分されるが、それは中部地方にある「障壁」が人々の東西交流を長く妨げてきたため、日本海側の親不知子不知の断崖海岸、太平洋側の天竜川や大井川など急流河川、その間に縦走する3000m級の急峻な山岳、そして監視の厳しい関所の存在が障壁となった。1920年代の通婚圏の調査で、東京を中心とした東日本と近畿を中心とした西日本の間の婚姻が僅少であることが分かり、それは東西の「隔離」の結果である。そして女性の東西移動の少なさが生活文化の東西差の要因となった。その後、交通や通信手段の発達による「隔たり」の解消で東西の地域性も不鮮明になりつつあるが、人の交流は今も近い者同士が密であることから、地域性は今後もなくなるならない。

生物の「種」の成立にも「隔たり」が重要であることを19世紀の動物地理学が明らかにしている。多彩な姿形をした生物がどのように生じたかは近代初期の自然科学の難問だったが、ダーウィンの「種の起源」がそれを説明した。その進化論は動物地理学ウォレスと共同発表だったことは知られていない。ウォレスはアマゾンを探検した際、川の両岸でサルが異なることを見出し、隔離された環境への適応が種の形成を導くとの仮説を着想した。それをさらに明瞭な隔離の場であるマレー海域の「離島」で生物をつぶさに観察して実証した。小笠原や南西諸島に固有種が多いのも「隔離」ゆえである。

「大人の教養倶楽部」講演後の感想

教養学部言語文化学科

李 承赫

2021年10月9日、ホーイ記念館にて『「遠い国」と「近い国」－国際関係における「ディスタンス」とは』というタイトルで『大人の教養倶楽部』シリーズ二番目の講演を行った。11人の一般地域の住民の方々が参加し、リラックスした雰囲気の中で講演と討論ができた。

世界には地理的には近いのになぜか遠く感じてしまう外国があり、逆に空間的には遠くても「感情的な距離」は近い外国もある。つまり、実際の距離とは別に、私たちが感じるイメージ上の「ディスタンス」というのが存在する。

今のところ、実際の距離と「ディスタンス」の相互関係をきれいに説明する一つの理論はない。ただ、国家間の経済・安全保障上の利益関係の度合いとは別に、歴史・文化的な繋がりから醸成された他国に対する漠然な「親しみ・敵愾心」意識が、「ディスタンス」感情が特定の国の中でイメージとして広まる過程と深くかかわっているのは想像できる。したがって、私たちは我々が他国に対して抱いている「ディスタンス」感情の背景には、その国について社会から受け取った「ストーリー（物語・言説）」の影響があるという事実を自覚する必要がある。また我々が抱いている「ストーリー」がどれだけ単純化され、あるいは偏っているのかを常にチェックすることによってグローバル市民としての教養を養うことができる。

講演後Q&Aの時には、日本の地域間のおいても同じ「距離」と「ディスタンス」概念を当てはめることができるといったコメントがあり、また「集団的アイデンティティ」について参加者たちと討論する機会があった。

音で“隔たり”を超える

教養学部情報科学科

松尾 行雄

見えないが、音は聞こえることがある。また、隔たりがあっても音は聞こえる。本講演では、その音の特徴に着目して、隔たりを超えて、遠隔的に生き物を理解する研究について具体例を示しながら説明した。

多くの生き物は音を発する。生き物にとっての音は、コミュニケーションや反響定位のための手段である。ここで、反響定位とはコウモリやイルカのようにアクティブに自ら音を出し、反射してきたエコーを聞くことで周りの空間定位することで、アクティブ・ソナーと呼ばれる。この能力を工学的に応用した魚群探知機の研究について最初に紹介した。

続いて、音で隔たりを超える応用例として、セミの音の種識別を紹介した。石垣島にしか生息していないイシガキニイゼミは絶滅危惧種であり、種の保全のために毎年調査を行われていた。しかしながら、近縁種のヤエヤマニイゼミの生息域がほぼ重なっているだけでなく、外見的な差がほとんどないため、従来の調査方法では困難であった。これら2種のセミの鳴き声には違いがあることから、長期間の音響計測を行い、統計的手法を用いて2種の間の違いを明らかにした。現在、このような差に着目し、新しい生態分布調査方法に取り組んでいることを紹介した。

隔たりの空間としての都市 —密集空間で求められる作法—

教養学部地域構想学科

佐久間 政広

「2m以上離れなさい」と命ずるソーシャルディスタンスという言葉は、社会学を専門とする私には、違和感がありました。この言葉は人間関係における「近い／遠い」を言い表すと考えていたからです。「近い」人間関係と「遠い」人間関係とでは、求められる振る舞い方が対照的です。例えば、恋人が涙を流していたら「どうしたの?」と関心を示さねばなりません。街角で偶然すれ違った見知らぬ人なら、涙を流していても何も尋ねない無関心の態度が適切です。

この人間関係における「近い／遠い」は、空間距離の「近い／遠い」と関連しています。乗客がまばらな電車に乗ったとき、恋人が既に乗っていたら隣に座りますが、知り合いが誰もいないなら隣の人から離れて座ります。自分と相手との関係に応じて、空間距離を調整しています。

見知らぬ他者との空間距離の確保が難しいのが、都市です。都市では大勢の人が狭い空間にひしめき、多くの見知らぬ人と出会います。密集空間では、知らない人との空間距離をとろうとしても困難です。では、どうするか。満員電車の乗客たちは、互いに対して挨拶せず、視線を合わせず、バラバラに行動します。つまり、都市の密集空間では空間距離確保の困難さに、互いに無関心な態度をとることで対処しているのです。とはいえ、実は無関心ではありません。その証拠に、電車の中で助けを求める人に対して周囲が「我、関知せず」だったら、非難されます。関心を持ちつつ無関心を演じる、こうした態度が求められているのです。社会学者ゴフマンは、これを「儀礼的無関心」と呼びました。

モノのインターネット(IoT)を活用した 防災・減災の現状と課題

教養学部情報科学科

高橋 秀幸

本講座では、地域の防災・減災対策の強化に向けた手段の1つであるIoTおよびその関連技術と社会との隔たりをテーマとし、現在の取り組みや課題を紹介しながら議論を行った。

通信機能を備えた機器（例えば、家電、携帯端末、ロボット、センサなど）をIoT機器と呼ぶ。現在では、多種多様な分野でIoT機器が活用されつつある。本講座では、防災・減災に関わるIoT機器、人工知能（AI）、センサ技術に関わる社会における課題を紹介し、その後、課題解決に向けた取り組みについて紹介した。

まず、IoTとAIの関係について紹介し、IoT機器が知的に動作するための技術などを紹介した。次に、防災・減災分野において、豪雨対策に関連する技術について紹介した。特に、豪雨に伴う地滑りの予兆検知、地理情報システム（GIS）を活用した豪雨時の避難シミュレーションと河川の氾濫シミュレーションに関する研究事例を紹介した。そして、社会との隔たりとして、実運用時に向けた課題について紹介した。

次に、福島県いわき市を事例として、大震災からの復興に関するハード面とソフト面の隔たりについて紹介した。特に、人口減少、少子高齢化によるソフト面での課題を紹介し、消防団員の人手不足を例として、沿岸部地域向けのIoT機器を活用した避難誘導支援システムを紹介した。具体的には、従来、消防車等で行っていた見回りや広報活動をドローンなどが代わりに行う機能や実際の防災訓練の様子を紹介した。

今後の防災・減災への関心が高く、新たな支援技術や課題について活発な議論が行われた。

学びの隔たりを克服する

教養学部人間科学科

泉山 靖人

教育の歴史を見ると、人々の「学ぶ機会」が時代を追って拡大していることがわかります。そのような動きの中には大学を「外」に拡張しようとする動きも含まれ、大学の公開講座（「大人の教養倶楽部」もその具体例と言えます）などがおこなわれるようになってきました。

「教育」という言葉は「人の行動の変容を意図する働きかけ」と説明されますが、これを広くとらえると、19世紀の英国で、図書館を作り読書する人を増やそうとした社会運動も教育的な働きかけと言えます。

現代の社会では学ぶ機会が増えていますが、その利用を妨げている要因として、教育に対する家庭の意識や社会の受け皿の不十分さ（偏り）などが指摘できます。

日本において義務教育段階の学校は通学距離等が考慮されて運用されていますが、少子化の影響もあり高等学校などでは遠隔教育の導入もおこなわれています。新型コロナウイルス禍の中で集まるのが難しい状況になった際にも遠隔教育が注目されました。

このように、学ぶ機会を利用する上での課題を乗り越える取り組みは、学校以外の場でもさまざまおこなわれています。これまでに私が調査した中では、山間地や島嶼部など交通が必ずしも便利ではない地域の人々に図書館サービスを届ける取り組みもおこなわれています。

そのような取り組みには、同じ社会に暮らす人々が同じような学びの機会を得られるようにしようとする考えが強く見られます。このような考え方はこれからも重要になってくると思われます。

健康運動という考え方に対する隔たり

教養学部人間科学科

岡崎 勘造

「健康のために運動しましょう」。よく耳にするかと思います。運動すると心筋梗塞、脳梗塞、高血圧症、糖尿病、うつ病など心身の疾病予防に良いようです。なので、昔から色々なところで運動が推進されてきました。ところが、運動を実践する日本人は、20～30%程度でずっと増えていませんし、“運動習慣を改善することに関心が無い、改善するつもりはない”という日本人は40%もいます。

なぜ増えないのか、その理由は時間、場所、仲間がないともいわれますが、分かりやすい言い訳と思われれます。本心は面倒あるいは嫌いだからとのこと。何が面倒、嫌いなのか、それはハードワークです。なので、ハードワークでなくとも健康に良いかどうか、検証がされてきました。結果、効果有りです。ハードワークでなくとも健康に効く運動を「身体活動」と呼ぶようになりました。英語で言うとsports、exerciseではなくphysical activityです。買い物、旅行も含まれます。「鍛える」ではなく「動く」といったイメージです。

最近では、「座りすぎ時間」も危惧されています。座りすぎは、糖尿病、心血管疾患、総死亡率のリスクが高まります。起きている時間のうち、約60%が座っている時間になります。この時間は昔に比べ増えていますし、さらに増えると予想されています。特に、日本人は座りすぎのようで注意が必要です。因みに30分毎に2分間ほど立ち上がると良いようです。

以上のような「身体活動」「座りすぎ」の視点をお話しし、「健康運動という考え方に対する隔たり」を小さくするよう試みました。

ディスタンスで読む『ロミオとジュリエット』

教養学部言語文化学科

井上 正子

「あなたはなぜロミオなの？」シェイクスピアの戯曲『ロミオとジュリエット』を読んだことのない方でも、ジュリエットがバルコニーで吐露するこの台詞とあらすじ（敵対する家の人間とは知らずに恋をした若き男女の物語）をご存知だと思います。本講座では、この物語を「異性愛中心主義」と「ホモエロティシズム」という二つの鍵言葉で考えてみます。異性愛中心主義は、男女ペアの性愛を唯一の規範とする考え方、ホモエロティシズムは、同性に対する愛情や欲望のことです。

ロミオとジュリエットの物語には、実は隠れた主役がいます。ロミオの親友マキューシオです。キャピュレット側のティボルトに親友マキューシオを殺され、逆上したロミオがティボルトを殺し町から追放されてしまう。ロレンス神父の計らいで仮死状態にする薬を飲み目覚めたジュリエットとロミオが合流するという計画が失敗し、ジュリエットの死を嘆いたロミオが服毒自殺。目覚めたジュリエットも後追い自殺する。テキストを丁寧にみていくと、マキューシオの女嫌いとそのロミオに対する愛情にも気が付きます。『ロミオとジュリエット』の悲劇をマキューシオに着目して読むと、誰もが親しんできた純愛物語が同性愛的欲望に支えられていることに気付かされるのです。

文学作品の読みは時代の産物でもあります。異性愛中心的な読み方が好まれるのは、我われの生きる社会が異性愛社会、それも「強制的」な異性愛社会だからです。人文系の学問には社会を大きく変えることはできませんが、思考に刺激を与え、既存の性役割や異性愛中心主義的価値観に風穴をあけることができるのです。